

春を告げる大須戸能



4月3日(日) 八坂神社(大須戸集落)

江戸時代後期から地区住民の間で伝承されてきた「大須戸能」の定期能が行われ、「弓八幡(ゆみやわた)」「正尊(しょうぞん)」の能2演目と狂言「膏薬煉(こうやくねり)」が上演されました。市内外から約200人が訪れ、春の陽気の下で、優雅な舞を楽しみました。



狂言「膏薬煉」



狂言【膏薬煉】

鎌倉と都の膏薬練(薬屋)が膏薬の効能比べをし、双方の鼻の頭に薬をつけて吸い比べをした。



能「弓八幡」

能【弓八幡】

後宇多天皇の臣下(天皇に仕える者)が、石清水八幡宮に参詣に向かうと、高良の神が姿を現し、舞を舞って御代(天皇の治世)を祝った。



能「正尊」

能【正尊】

源頼朝が源義経を討つために都へ差し向けた土佐坊正尊は、義経と弁慶から来た目的を激しく問いただされ、起請文(神仏に誓約した文書)を読み上げその場を免れるも、弁慶に生け捕りにされた。



大須戸能の由来(新潟県無形文化財指定)

嘉永5年(1852年)2月の記録に「古来の能の衣裳が破損したので奉納を願う」とあることから推して大須戸能の起源はこれよりさらにさかのぼるものと推定されます。伝えによれば弘化元年(1844年)の冬、庄内の黒川能役者蛸井甚助が当地に滞在した際、庄屋、神主など村人19人の能社中が、数年にわたり熱心な指導をうけ、嘉永4年3月鎮守八坂神社の社殿ではじめて演能したとされています。現在は、大須戸能保存会が継承し、4月3日のほかに8月15日に新能としても公開しています。